



DENNESEN

JC-80

Reference Standard Preamplifier



●ディネセン—コントロールアンプ

JC80

¥1,650,000 (ケース付)

●入力端子・入力インピーダンス：PHONO1・3Ω～100kΩ、PHONO2・0Ω～50Ω、AUX、TUNER、TAPE1/2・15kΩ ●PHONOゲイン：40/60dB(2段切替) ●出力レベル：2VRMS(最大15VRMS) ●SN比：100dBs(Low GAIN)、80dBs(HIGH GAIN) ●寸法：W48.3×H4.8×D35.5cm(本体)、W18.0×H18.5×D19.5cm(電源部)

ジョン・カール設計のコントロールアンプ。傑出したパフォーマンス。質感のよさ。みごとな響き。低域の分解能も高い。注目すべきモデルの登場

— 山中敬三

ジョン・カールは現在アメリカでもっとも才能あるアンプデザイナーの一人にあげられる。彼はフリーのエンジニアとして、これまでマーク・レビンソンやシンメトリ

—あるいはSOTAなどの会社で、多くのアンプを手掛けてきているが、約10年前にマーク・レビンソンのもとで発表したJC2コントロールアンプは、その中でも特に有名であり、わが国でも多くの愛用者を得た。モデル名に彼のイニシャルを冠した同

アンプは、その後ML1、ML6へと発展し、同社コントロールアンプの現有ラインの原点となったのである。

そのジョン・カールがひさしぶりに腕をふるった最新のコントロールアンプが、マサチューセッツのディネセン社からデビューすることになった。モデル名には再び彼

のイニシャルが受継がれ、80年代のJCという意味をこめてJC80としている点が大いに興味をそそられる。ディネセンという会社は、これまでわが国ではほとんどなじみはないが、5年前に設立されたアンプ

—やスピーカーの新進メーカーであり、今回のコントロールアンプをきっかけとして、いわゆるハイエンドオーディオの分野に本格進出をめざすことになったのである。

●回路・コンストラクション

JC80はいままでもなく、現時点における最高の性能を狙ったコントロールアンプとして、先発のマーク・レビンソンML6ALやクレルKRS1と同じく完全モノラル方式を採用した薄形モデルである。回路はオールFET、DCカップルによるコンプリメンタリー・プッシュプル、クラ

スA動作で一貫しており、バッシングタイプ(CRタイプ)のR-1Aアイコライザー、ノンNFB入力ステージなど、動特性を重視した設計は、これまでのJCアンプと一線を画したものとなっている。

—フォノ1はゲインを二段階に切替えができ、ローポジションでは40dB、ハイでは60dBとなる。一方のフォノ2は60dBにゲインが固定されている。したがってゲイン60dBを使用することで出力の極端に低いMC型を除けば、ほとんどのMC型カートリッジがダイレクトに入力可能だ。入力インピー

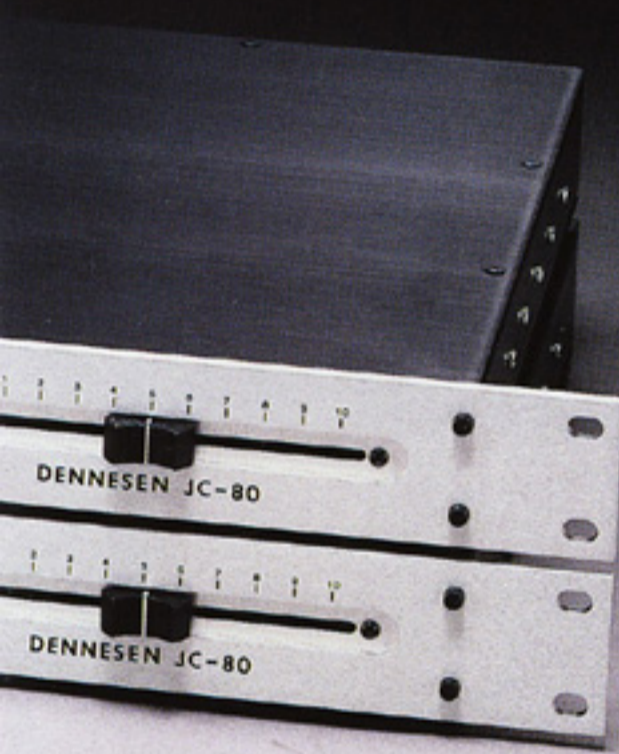
—ダンスは2系統別々に調整が可能であり、フォノ1は内部のDIPスイッチの組合せによりロードが3Ωから100kΩまで15段階で選べる。一方フォノ2はリアパネルに設けられた半固定ボリュームにより0か

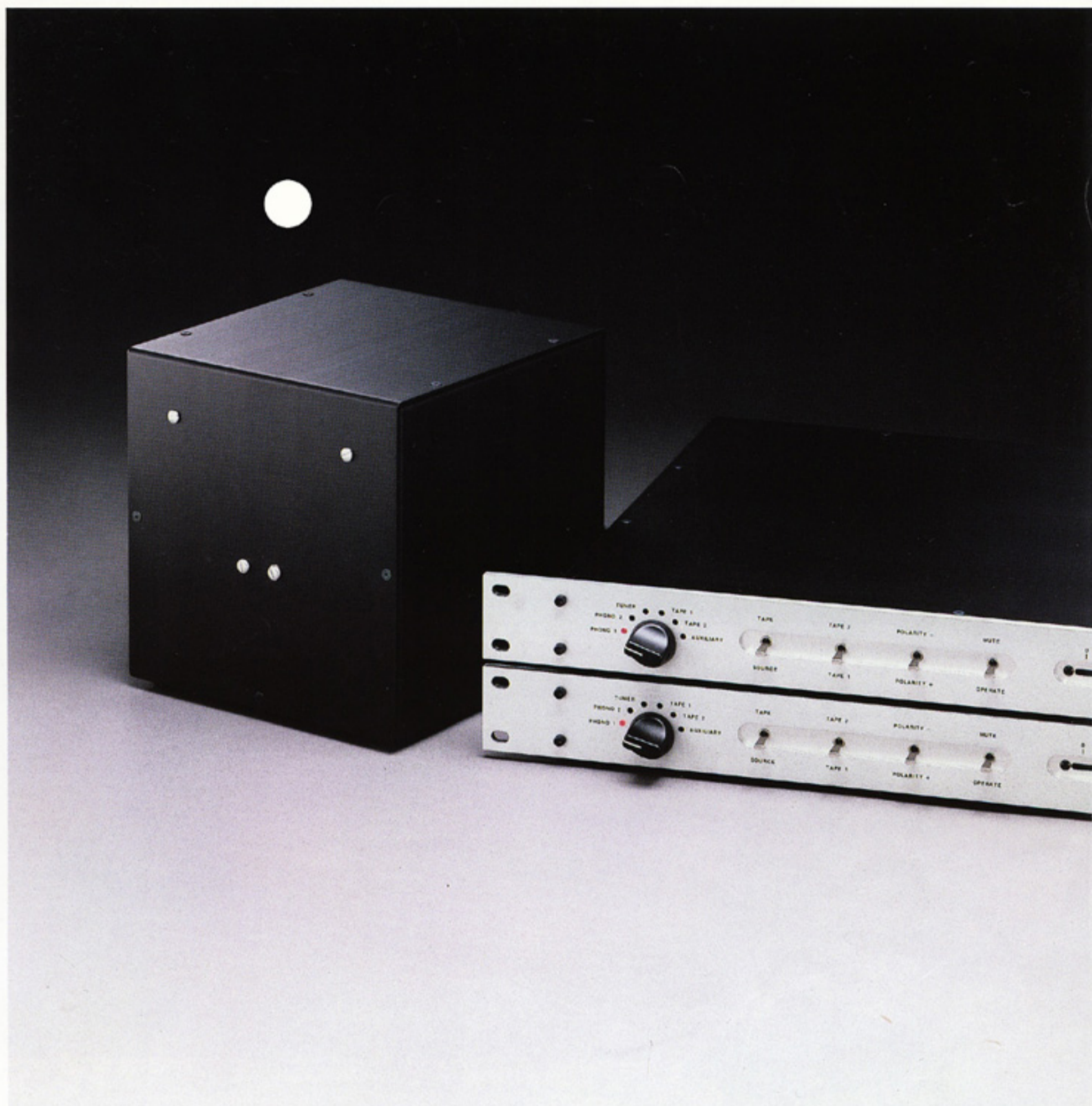
ら50Ωの範囲で連続可変となっており、したがってこれはMCカートリッジ専用入力ということになる。

—ラインステージのゲインもスイッチで24dBと14dBの何れかが選べるので、高能率スピーカーを使用した場合のSN比を稼ぐために効果をあげる。なおライン入力系のインピーダンスは15kΩとやや低めだ。入力切替えをはじめとする総てのスイッチ類は、金接点のハーメチックシールド・リレーによりリモートコントロールされているので、基板上のシグナルパスが最短距離となっていることも性能上見逃がせない利点である。

このJC80のユニークなフィーチャはスライドタイプのレベルコントロールで、イギリスP&G製のスタジオ精密級フェーダー・ポテンシオメーターが採用されており、L・R各チャンネルのアンプをスタックしてセットすると、二本の指で両チャンネルが同時にコントロールできるため、モノラル型式のコントロールアンプの扱いにくさがかなりすくわれる。本物のフェーダーだけに動きは大変スムーズなのはさすがである。

コントロール機能はこの種のコントロールアンプの中でもっとも充実しており、フォノ2系統、テープ2系統を含め6系統の入力、二つのテープ出力を備え、ミュートスイッチの他、フェイズ切替スイッチが特に設けられている。これは最近注目されつつあるアブソリュート・フェイズ調整のため、両チャンネルのフェイズをそっくり切替えることにより、ステレオ音場の再現





▶ポラリティSWを持つ

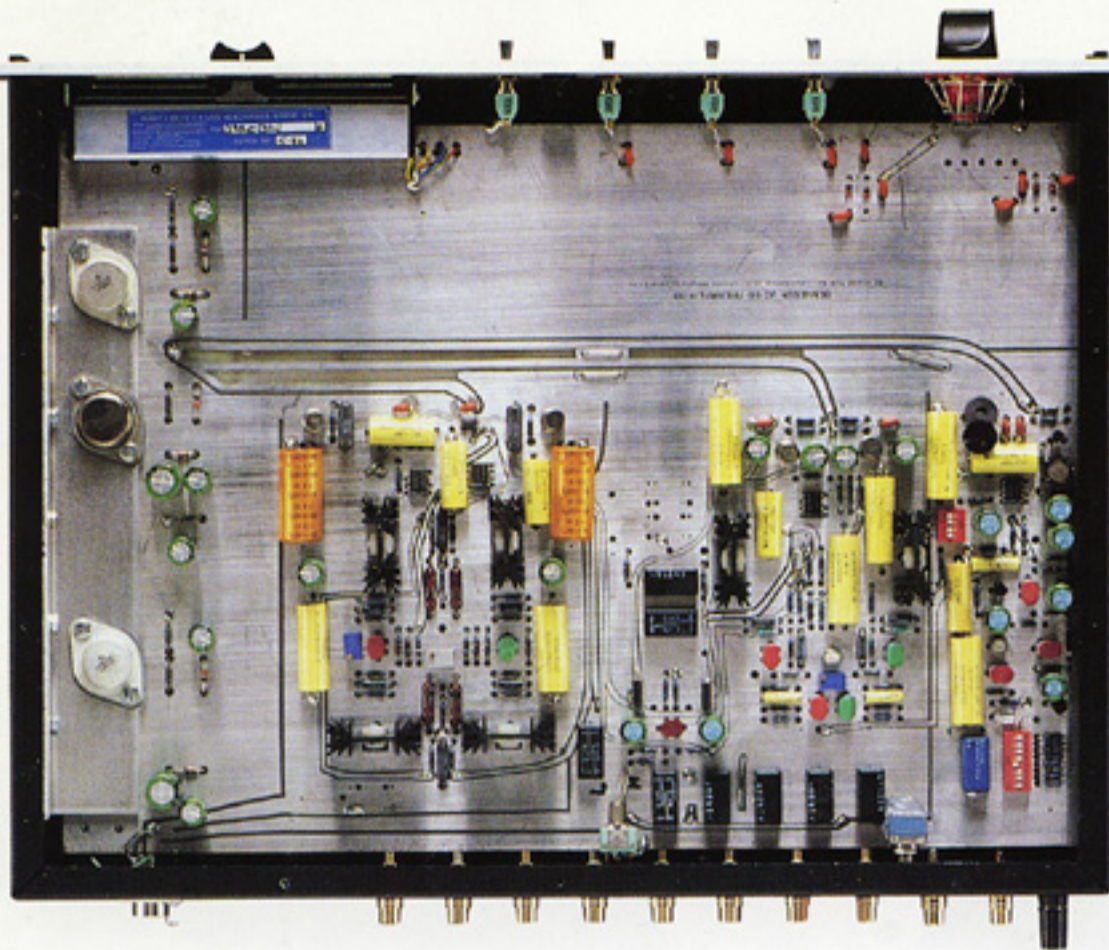
▶P&Gのフェーダーが特徴的なフロントパネル



▶薄型モデルながら入出力は充実している



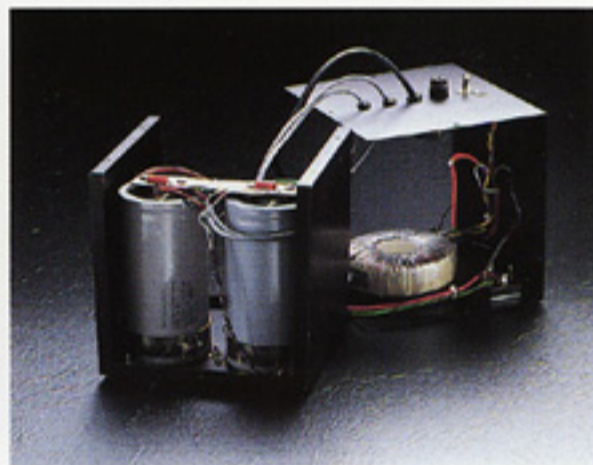
録音時のアブソリュート・フェイズが現



▲アンプ内部。右下端のDIPスイッチがフォノ1のロードセクターで3Ω-100kΩの15ポイントを選べる。その上の中央には2段のゲイン切替スイッチを装備。また、下部中央にはラインステージのゲイン切替SWがあり、14dBと24dBが選択可能。左サイドのトランジスターは各ステージのレギュレーター用



▲PENNY & GILESのフェーダーはプロ用機器に好んで使われ、性能だけでなく操作感も優れたパーツだ



▲並のプリメインアンプを軽く凌ごうかというほどの電源部。コンデンサーは22,000μFのものを2本使用

在のところ揃えられていないため、このスイッチの実用性はきわめて高いといえる。アンプの全回路が一枚の大型基板上にまとめられた内部構造のため、みたくは大変シンプルなものとなっている。電源部は別シャーシとなっており、両チャンネルを一つの電源から供給する方式だ。まるでパワーアンプなみの電源トランスと大型大容量ケミカルコンデンサーが電源部に組み込まれ、アンプ側に各ステージ毎に独立させたレギュレーターが設けられている。このレギュレーター用のトランジスターはシャーシ左サイドに直付けされ、シャーシそのものがヒートシンクとして働く構造であり、同様に各アンプ部の出力ステージに使われているパワーアンプ級のFETのヒートシンクも、シャーシ上板に接して放熱効果を助けるようになっていて、そのためシャーシ全体はコントロールアンプとは思えぬほど熱を発するので、セッティングの際には適度な放熱ができるように考慮する必要がある。本機に使われた抵抗、コンデンサーなどパーツ類は、何れもミリタリーグレードか、それに準ずるものとなっており、前述のフェーダーや、リレースイッチなどどれをみても、経年変化によるロスを最少限に防ぐ対策が入念にとられているので、信頼性の面では充分安心して使える製品となっている。ただこのリポートで試用した製品が、最初のプリプロモデルのせいなのか、コンストラクションがいまひとつ垢ぬけない感じで、高級アンプらしいイメージに不足した。実際の製品ではこれらの点が解決することを期待したい。

●音質

実はこういう苦言をどうしても呈したくなるほど、このアンプから得られたサウンドはすばらしいものであり、最近の高級ソリッドステートコントロールアンプの中でも傑出したパフォーマンスを示したのである。

本機の音の魅力は、なによりもその質感のよさにある。一音一音がきれいに整理され、しかも際立ってディテールを克明に再現する能力は、まさにソリッドステートアンプならではのものであるが、それらを緊密に結びつけて、みごとな響きにまとめる能力が、このアンプには完全に備わっている印象だ。細部の彫りが深く、しかも響きのよさと調和するので、クラシック系のソースの微妙なニュアンスを正確に描きだした。これは従来のソリッドステートコントロールアンプになかった世界といつてよい。強力な電源部によってもたらされたものか、低域の分解能の高さも特筆してよい。実在のエネルギーを感じさせる締まった低音部は、音場そのものを静かに深く見透しのよいものとしている。注目すべきコントロールアンプの登場といえよう。

聴感上唯一つの問題点といえるのは、ラインアンプステージの残留ノイズだ。高効率スピーカーと大出力アンプの組合せの場合、ややノイズが耳につく、ラインアンプのゲインを落せば問題はないが、このクラスのコントロールアンプとしては、もう少しSN比に余裕が欲しい気がする。最近のようにCDソースが増えてくると、これはなおさらであろう。